

訪タイ報告書（5 回目）

2024 年 8 月 31 日

加藤 昭宏

1. はじめに

今回は 5 回目の訪問である。これまでの現地調査から、チェンダオにある โรงเรียนพัฒนาดันน้ำขุนทอง（以下、A 学校）、およびその周辺の村 BAN KHUN KHONG（以下、B 村）の状況として、以下のことが確認されていた（加藤（2024）参照）。

- ・A 学校の先生曰く「勉強に対する意欲がない子どもが多い」。「『将来、何の仕事をしたいか？』と尋ねても、畑仕事以外を知らないためか『わからない』と答える子が多い」。

背景には、「マーケットやチェンマイ市街地まで遠く離れているため、職業体験もできず、本物の仕事を見たことがないからである」（と A 学校の先生は考えている）。

- ・「職業体験を企画したいが」、「学校もお金がなく、企画を出来ない現状」がある。

加えて「各家庭からお金を出してもらうと、特にお金がない家庭は参加できなくなってしまう」ことも懸念されていた。

- ・また A 学校の授業内で「（筆者から）日本での経験や文化等について話してもらえると、子ども達の世界が広がるのではないかと」の話をいただいていた（以下、国際福祉教育）。

これらのことから今回の訪問の目的は、①国際福祉教育を実施すること、②職業体験を学校と協働して企画できるよう A 学校の先生たちに提案すること、そして③リス族が作ったものなどを購入すること（そしてそれを日本で販売し、売り上げを②職業体験企画の資金とすること）の 3 点とした。

なお、筆者のゼミ生が 4 名（4 年生）同行希望を申し出てくれ、最終的に 2 名の学生が同行することとなった。同行にあたっては、学内の関係各所と調整し、学生の保護者の合意を得て実施に至った。

2. 全体の行程について

○1 日目 2024.8.8（木）

- ・セントレアにて学生 2 名と集合。バンコク（スワンナプーム国際空港）経由で 18 時にチェンマイへ。
- ・タクシーにてチェンダオにある B 村へ。

○2 日目 2024.8.9（金）

- ・A 学校へ。急遽、同日に①国際福祉教育を実施することに。

○3 日目 2024.8.10（土）

- ・リス族のいる市場へ。午後からは B 村内で子どもらと交流。

○4 日目 2024.8.11（日）

- ・学校にて月曜日のイベントの準備を見学。午後から、②職業体験企画について先生らと話し合い。

○5 日目 2024.8.12（月）

- ・タイにおける母の日。学校内でのイベントを見学させていただく。午後からは B 村内で子どもらと交流。

○6 日目 2024.8.13（火）

- ・チェンマイ都市部へ。③物資を購入。夜、チェンマイを発ち、バンコク経由でセントレアへ（14 日朝着）。

3. ①国際福祉教育の実施

前回の訪問から、窓口の先生が変わっていた（英語の先生から音楽の先生（以下、C 先生）へ：訪タイ報告書④参照）。

C 先生へ事前に、8 月 12 日（月）に A 学校へ行きたいこと、授業内で子どもたちへ動画を用いて日本について紹介する時間をいただきたいことなどを伝えており了承を得ていた。しかし学校へ行き改めて確認をしたところ、「月曜日は学校内で大きなイベントがあり、時間を確保することが難しい」とのこと。

このことから、急遽午後、予定を早めて国際福祉教育を実施することとなった。

また国際福祉教育の実施にあたっては、現 4 年生のゼミ生とともに、3 年次から準備を進めてきた。具体的には、3 年次に、「訪タイ報告書」①～③をゼミ内で読み進めた後、14 人のゼミ生がそれぞれ「文化」「教育」「社会的排除」「薬物・貧困」の 4 テーマごとにチームを作り、チームごとでタイ・チェンマイやリス族の現状について調べ、発表を行った（3 年次後期最終講義内）。

その後、筆者による 4 回目の訪問（「訪タイ報告書」④参照）を行った。そして 4 年次前期のゼミ内で、同報告書をもとに現状を共有した後、国際福祉教育の準備を行った。ここでは、「①何が問題で、②どのようにアプローチができるか」について話し合いを行った。そして、教育の重要性等を直接的に伝えるのではなく、「日本のことを知ってもらいたい」という表テーマのもと、裏テーマを設けて授業教材を作成していくことなどが方向性として挙げられた。

その上で国際福祉教育における目的のメインテーマを「リス族の子どもたちが将来の夢を描けるようになること」として、サブテーマを「職業選択の幅が広がること」「学習意欲が向上すること」「自己肯定感があがること」の 3 点とした。

またリス族の現状を分析し、以下の「負の循環ループ」があるのではと仮定した。

- ①（教育、世帯、地理的要因の影響があり）将来の夢を描けない・仕事を知らない
- ②勉強の意欲がない
- ③進学率が低い
- ④親の仕事を手伝うのみ（あるいは都市部への出稼ぎ等）→①へ…
- ※また③④から⑤大麻の使用へつながることもある

以上の仮定のもと「国際福祉教育実践を通して負の循環ループを断ち切りたい」という議論があった。これらの議論を経て、当日のプログラムの検討を行った。

当初検討していた当日プログラムは以下のとおりである。

- ①導入：加藤から
- ②日本の文化について：富士山、アニメなど
- ③日本・タイの職業について：職業ランキングの紹介（日本・タイ）など
- ④自分たちのストーリーについて：子どもの頃の夢と現在など
- ⑤日本での生活について：1 日、1 週間のスケジュールなど
- ⑥まとめ：将来の可能性があること、今を大切にしてほしいこと、など

上記①～⑥の中で、導入・まとめを除く②～⑤についてそれぞれグループに分かれて教材作成を行っていくこととした。ここでは、②⑤で 1 チーム、③④で 1 チームとして、動画やパワーポイント資料の作成に取りかかった。そして複数回にわたるグループ内ディスカッション、全体での進捗の共有を経て、最終的にプログラムは以下のとおりとなった。

①導入：加藤から

②日本についての紹介動画

③日本とタイの職業について：職業ランキングについて、動画、クイズを用いて紹介

④まとめ

→その後、学生と子どもらとの交流の時間を設けて、体験プログラムを実施：ネイル・スポーツ（ドッチビー）

当日の国際福祉教育の様子は以下のとおりである。小学 1 ～ 3 年生約 125 人が参加をしてくれた。



4. ②職業体験企画について先生らと話し合い

職業体験の企画については、3 年次のゼミ生 12 名とともに準備を行ってきた。具体的には、加藤から「訪タイ報告書」④を中心に、タイ・チェンマイの現状を共有した。その後、まずは①何が課題か、②どう働きかけたいかについて議論。またここでは、タイだけでなく日本国内で行いたい取り組みについても話し合われた（チラシを作成し、リス族の現状について知ってもらいたい、学園祭やオープンキャンパスなどでゼミ活動を紹介したい、など）。

その上で、職業体験企画の内容についての検討を重ねた。ここでは、「ヤングケアラーなどの理由により学校に来られていない子にこそ、職場体験ツアーに参加してもらいたい。どのようにしたらよいだろうか。」「職場体験企画の動画を撮り、参加できなかった子どもへ見せたい。どうしたらよいか。」「職場『見学』に留まらず『体験』ができるようにしたい。」などの意見が挙がった。

また 4 年次ゼミの国際福祉教育についても適宜進捗状況を共有し、国際福祉教育と職業体験とが連動するような形で実施を検討していくこととした（例えば、国際福祉教育内で紹介する職業を実際に体験に行く、など）。

これらの議論をもとに、以下のような「企画書」を作成し、日本語版・英語版を作成し持参した。

チェンマイ都市部での職場体験ツアーの協働企画の提案について

同朋大学 社会福祉学部

加藤研究室

加藤昭宏

校長先生・教員の皆さまへ

1. はじめに

私は、日本の大学で福祉の研究をしています。これまで 4 回、この学校（โรงเรียนพัฒนาคอนน้ำขุนคอง）に来て、先生たちや子どもたちから話を聞き、「何か日本からやれることがないか」と考えてきました。

そこで、子どもたちの勉強に対する意欲の向上を目的とした「職業体験ツアー」を、先生方と一緒に企画をしたいと思っています。

2. 企画に至った背景

2019 年にこの学校に来た時に、英語の先生から次のような話を聞きました。

- ・勉強に対する意欲がない子どもが多い。
- ・将来「どのような職業に就きたいか」と先生が子どもたちに聞いても、「わからない」と答える子どもが多い。
- ・その理由として、都心部から遠く離れており、多くの仕事を実際に見たことがないからだと考えている。
- ・学校（โรงเรียนพัฒนาคอนน้ำขุนคอง）として、職業体験を企画したいと思っている。しかし、学校（โรงเรียนพัฒนาคอนน้ำขุนคอง）もお金がなく、企画出来ない。

・それぞれの家庭からお金を出してもらおうと、お金がない家庭は参加できなくなってしまう。

これらのことから、学校と、私たち「加藤研究室」とが協働して、職業体験ツアーを企画したいです。それによって、子どもたちの将来の職業選択の幅が広がり、勉強に対する意欲を上げることを目的とします。

3. 職業体験ツアーの概要

バスをチャーターしてもらえないでしょうか？そして、そのバスでチェンマイの都市部まで行きます。そこで、子どもたちに、実際の職業を体験してもらいたいと思っています。

4. 協議をしたい事項

①対象の子どもの学年

先生と相談しながら決めていきたいです。例えば、今回、私たち加藤研究室の講義を聞いてもらった学年の子どもたちではいかがでしょうか？

②職業体験先について

先生と相談しながら決めていきたいです。

「見学」だけでなく、子どもたちが「体験」できる職業がいいのではないかと考えています。

例えば美容師、パティシエ、料理人、スポーツ選手、医者、運転手、レストラン、警察などです。

また、職場体験先の交渉、確保をお願いできないでしょうか。

③資金について

実際に実行する場合、バス代やガソリン代など、大体いくらかの金額が必要でしょうか。加藤研究室の活動の一つとして、日本で資金を募りたいと思っています。

例えば、リス族が作っている物などで、何か購入できるものはありますでしょうか？それを日本で売って、資金を募ることも考えています。

④スケジュール

先生と相談しながら決めていきたいです。また、その時には、私たちも一緒に参加をしたいと思っています。

5. その他

①今回の加藤研究室の授業について

今回、加藤研究室の学生から、「日本の文化や職業」について授業で紹介をさせていただきました。

それによって、子どもたちに対してどのような影響があったか、また教えていただきたいです。

②次回について

このような機会を今後もいただくことができれば嬉しいです。

次回は、大学生から子どもたちへ、動画の作成方法を教えたり、一緒にスポーツ（サッカーなど）を楽しむことができればと思っています。

よろしくお願いいたします。

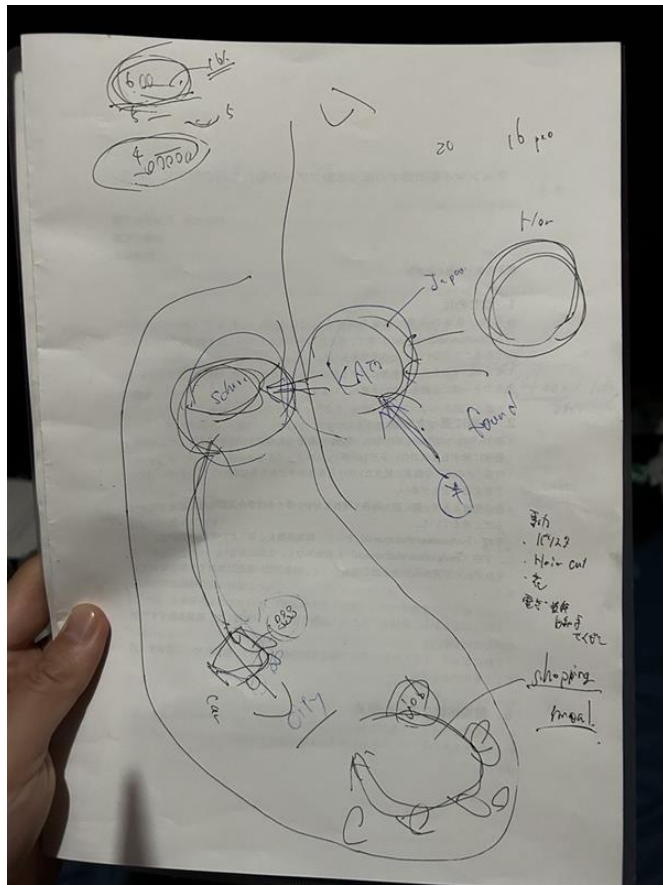
企画についての説明の様子は、以下の写真のとおりである。お互い、第二言語である英語を介しての交渉であり、コミュニケーションをより円滑に進めるために、翻訳機（Google 翻訳・およびオフライン対応の翻訳機）を活用した。加えて、適宜、手書きの図（写真・右下）を描きながら説明を行った。

⇒これらの結果、**来年の 8 月に、小学生 6 年生（現 16 名）を対象に実施できるよう学校とともに計画を立てていくこととなった。**

なお、実施に必要な金額を確認したところ、①移動代：約 4000 バーツ、②昼食代：一人 100 バーツ、**計 5600 バーツ（約 22,400 円）が必要**とのことであった。

また行き先の候補としては、①**大型のショッピングモールなどの複合施設**（様々な仕事を見ることができるため）、および②**職業体験の専門学校（職業訓練校）**ではどうか、と提案いただいた。

②については、学校からまずは手紙を出し、交渉いただけるとのことであった。



5. ③リス族が作ったものなどの購入

最終日（2024.8.13）を中心に、ポーチやカバンなどを購入。これらを学園祭などの場で販売して、売り上げ分を②「職業体験企画」の原資とすることとした。



6. 同行学生の感想

今回の活動で、実際に現地に行き、そこに住む人たちの話を聞いたり、地域の空気感やどのようなところで暮らしているのかを自分の目で見て感じることで、フィールドワークの重要性に対して理解を深めることができました。ほかにも、この活動は、日本のことをタイの子どもたちに伝えたり、職業について知ってもらうことで将来の選択肢を広げるといった国際福祉の要素もありながら、子どもたちへの働きかけを通して学校の先生など周りの大人にも影響を与えて、地域全体に働きかける地域福祉の要素もあると感じました。

活動のなかで、タクシードライバーの方に今回の活動について話をしたところ、「村の特産品や伝統的なものを活かして観光資源にするようなエコツーリズムについても考えてみたらどうか」という提案がありました。もちろん、日本の文化について紹介したり、都市部の様々な仕事を見て、将来の選択を広げられるようにすることも必要だけれど、自分が育った村や自分のルーツを大切に思える心を持ち、色んな人にリス族のことを知ってもらいたいと思えるような意識づくりをすることも必要なのではないかと思います。

この活動は加藤先生が5年前から行っていますが、何度も村を訪れたり、子どもたちと関わってきたからこそその信頼関係があったり、子どもたちの変化に気づくことができるため、つながり続けるという伴走型支援

が国際福祉においても大切なことであると学びました。子どもたちからも「また来年来ますか？」と聞かれたときに、つながった縁を今回だけのものにせず、これからもこの活動に携わり、子どもたちがどのような大人になるのか、子どもたちや地域にどのような影響を与えられたのかを長い目で見ていくことができれば良いなと感じました。また、自分の思ったことを自力で伝えられたり、円滑なコミュニケーションをとったりするためにタイ語を勉強したいと思いました。

今回タイに訪問してみて、自分が今回行ったことが将来の子ども達にどんなに小さいことでもいいので何かしらいい形で影響していつてくれるといいなと感じました。

まず 2 日目の金曜日に、5 日目の月曜日にやるはずだった国際福祉教育を急遽生徒の前で行うことになりました。元々は英語で話し、それをタイの先生方にタイ語に翻訳してもらうという予定でしたが、本番前に翻訳機を使い、そのまま日本語をタイ語に翻訳して伝える流れに変更となりました。原稿を 1 文 1 文翻訳機で翻訳していくため、多くの時間を必要としてしまい、小学生の子達が聞く気をなくしてしまうのではないかと不安でした。そのため、原稿をところどころ省略して話すことを心がけました。

私が原稿で担当した箇所にクイズの部分があり、「職業ランキングで日本とタイの 2 位はなんでしょう」というクイズでは、あまり手は挙がらず、なんとか 2、3 人当てて終わろうと考えていました。しかし、実際には、ほぼ全員が前に飛び出す勢いで挙手をしてくれていました。企画段階で、小学生が楽しみながら国際福祉教育に参加してもらえるためにはどうしたら良いかということを小学生の目線に立ち、考えることができた結果が出たと感じました。小学生に日本からのお土産であるどら焼きやチョコレート菓子を配った際、好きなものを持っていてもらう形式だったのですが、ほとんどの子がどら焼きを持っており、タイでのドラえものの知名度が高いことが考えられました。

午後からは、フリスビーをして小学生と遊びました。小学校は通信が悪く、スマートフォンの翻訳アプリを使うことができず、言葉でのコミュニケーションが取れませんでした。しかし、ジェスチャーと表情で「フリスビーで遊ばない？」と提案し、フリスビーで遊ぶことができました。言葉以外での意思疎通ができたことにすごく感動しました。タイにはフリスビーというものはないと小学生の子達が言っており、みんな新しい遊び道具に興味津々でした。

3 日目の土曜日には、ホームステイ先で子ども達と鬼ごっこをして遊び、ラポールの形成に取り組みました。その中で子ども達から暴力に近い行為を受けましたが、これも一つの表現方法なのではないかと考えていました。そこから子ども達が何かを私に伝えたかったのではないかと考えています。

4 日目の日曜日には、先生達と職業体験企画の話し合いを行いました。その会話の中で「実際タイの子ども達は自分の就きたい職業につけていない。性風俗での就職でも、多額のお金が稼げるので親としては喜んでいる」と通訳の方がおっしゃっていました。私は、村の子ども達は将来の夢が見つからないとばかり、前回の「訪タイ報告」から思っていたので意外でした。家庭の状況的に希望の職業につけていない子もいること、学歴的に希望の職業につけていない子も一定数いることも考えられました。

こうしてリス族の子ども達への支援を今までは「訪タイ報告書」を通じて知っていただけでしたが、今回、自分の目で見て自分の肌で感じる事ができたことが何よりも学習となったと感じています。今回参加できて非常に良かったです。

7. 今後の活動予定について

〈2024 年度〉

現地調査を継続し、困難を抱える子どもたちやその世帯の状況把握、および教員の取組みの状況を確認していく。また並行し、地域支援実践として国際福祉教育（2 回目）を行う（2、3 月頃を予定）。

〈2025 年度〉

困難を抱える子どもたちやその世帯について、教員や村人とも協働し個別支援を行う。

また並行し、国際福祉教育実践（2 年目）をさらに展開していく。

〈2026 年度〉

これまでの個別支援、地域支援実践を振り返り、継続しつつ、困難を抱える子どもやその世帯、地域課題に対するソーシャルアクションを展開していく（「学習意欲の低い子どもたち」など子ども全体への働きかけの検討）。

加えて、日本において国際協力オンライン交流授業の準備を行う（日本側の受け入れ体制の整備、事前学習プログラムの検討・実施）。

〈2027 年度〉

個別支援、地域支援実践（ソーシャルアクション含む）を展開しつつ、国際協力オンライン交流授業として、日本の小・中学校とのオンラインを通じた相互援助活動を展開する。

〈2028 年度〉

個別支援、地域支援実践を展開しつつ、これらの活動が地域内で維持・継続されるための「継続性を担保するための仕組み化」を検討していく。

8. まとめ

今回も、大きなトラブルなく渡航を終えることができた。また急遽国際福祉教育の実施日が変わるなど柔軟な対応が求められることもあったが、A 学校の先生方のご協力により無事に実施することができた。

事前連絡では、メールのみでのやり取りであり、必ずしも意思疎通がうまくいくわけではないが、今回、窓口となった C 先生と対面で話をする時間も設けることができ、筆者の想いや次回以降の動きについても相談することができた。

なお、次回（2025 年 2、3 月を予定）は、「トンカツなど、日本の料理の作り方も教えてほしい」と先生方から話があった。これらについて、4 年生のゼミ生を中心に、その内容を引き続き検討していきたい。

今後、③で購入した物資を学園祭等で販売し資金を集めつつ、チラシ作成、SNS などを通して周知・啓発を継続していきたい（3 年次ゼミ）。そして、①国際福祉教育や②職業体験企画が継続実施できるよう、基盤整備を図っていきたい。

ここまでお読みくださり、ありがとうございます。

また本プロセスに関わるすべての人に、感謝申し上げます。

加藤 昭宏

<参考文献>

加藤昭宏（2019）「訪タイ報告書」

https://www.doho.ac.jp/images/pdf/professor/a_kato01.pdf

加藤昭宏（2019「訪タイ報告書（2 回目）」.

https://www.doho.ac.jp/images/pdf/professor/a_kato02.pdf

加藤昭宏（2023）「訪タイ報告書（3 回目）」

https://www.doho.ac.jp/images/pdf/professor/a_kato03.pdf

加藤昭宏（2024）「訪タイ報告書（4 回目）」

https://www.doho.ac.jp/images/pdf/professor/a_kato04.pdf

加藤昭宏（2024）「タイ・チェンマイの中山間地域におけるメゾ・マクロ実践に関する予備的調査」
『同朋福祉』（31）：135-157.